

2010(平成 22)年 3 月 27 日

それから四年

学部 12 回 吉本信之



私は四年前の「大阪瓊林 93 号」(平成 18 年 4 月発行)に「母校の百周年記念とわが家族史の一端」と題する一文を寄稿した。2005 年(平成 17 年)10 月 8 日の母校創立百周年記念式典に参加したのを機会にまとめたものである。母校長崎高商は 1905 年(明治 38 年)創立、私の父も同年生まれ、従って 2005 年(平成 17 年)は母校の 100 周年、父の生誕 100 年という節目の年であったのである。父は長崎高商に学び大正 15 年に卒業(高商 19 回卒)すぐに渡鮮し昭 20 年まで 20 年間、朝鮮金融組合に勤務した。その関係で私は朝鮮金融組合のことに興味を持ち、関連する本や資料を探し情報を集めていた。

私は四年前の一文の最後に次のように書いた。

「朝鮮金融組合関連で集めた本のなかでひとつだけ挙げておきたい。重松嗣修(まさなお)氏の『朝鮮農村物語』昭和 16 年刊である。重松氏は朝鮮金融組合のある地方(現在の北朝鮮)の組合理事として農村の振興、農民の自力更生に全身全霊を打ち込まれた。特に副業として養鶏を奨励し、「卵から豚へ、牛へ、土地へ」のスローガンのもと勤儉・貯蓄を実践・指導された。その愛と真心からの熱き指導ぶりが『朝鮮農村物語』で読み取れる。感銘するところ多し、落涙するところ多しの本である。私が引き続き調べているのは重松氏が終戦後無事に引揚げられたかどうかということである。朝鮮時代に活躍した人で、語り継ぐに値する人格者の一人であると私は尊敬している。」

四年前にこれを書いた直後から戦後の重松嗣修(まさなお)氏の情報、資料探索に力を入れた。重松氏は明治 24 年(1891 年)生まれであるので既に亡くなっておられるだろうが、戦後無事に引揚げられたとしたらご遺族の方がいらっしゃるのではないかと思い探すことにした。『朝鮮金融組合回顧録』に佐藤氏が重松氏の思い出を書いておられる一文があった。佐藤氏は岡山市在住とあったので電話帳で調べ電話してみた。四年前のその当時、佐藤氏は 99 歳、奥様は 90 歳とご高齢ながらも共にご健在であった。朝鮮時代には重松氏とは家族ぐるみのお付き合いをしていた、重松氏は松山に引揚げられた、いまでも娘さん夫婦、お孫さんたちが松山に住んでおられると教えて頂き、紹介して頂いた。平成 18 年 10 月に松山に行き遺族の方々とお会いした。娘さんは 80 歳になっておられたが朝鮮金融組合時代のお父上のこと、引揚げ後のお父上のこと、ご家族のことを語られた。重松氏は引揚げ後も家族で「卵から牛へ」を実践され、朝鮮時代に自分が農民たちに指導奨励したことが決して無理を強いたものではなかったということを改めて確認され、昭和 50 年に 84 歳でお亡くなりになったそうである。この訪問のあと私の資料探索はますます拍車がかかり、かなりの資料や本に目を通しコピーをとった。平成 19 年 1 月これらを整理しファイル 2 冊にまとめ松山に送った。さらに平成 19 年 5 月に松山を再訪したが、この時はファイル 4 冊を持参した。月刊機関誌

『金融組合』（前身の『金融と経済』を含む）25年分300冊からの重松氏関連の記事、論文をまとめたものである。約1000ページを4分冊にまとめた。

こうしているうちに、世の中広いもので、私と同じように重松氏の『朝鮮農村物語』を読んで感動し、松山のご遺族も探し出し、今年の1月に本を出版した方が出現したのである。その方とは近現代史研究家の田中秀雄氏で、『朝鮮で聖者と呼ばれた日本人 - 重松麟修物語 - 』というタイトルで本を出版された。私はこの新刊本のレビューとして次のような讃辞を送っている。

「私は数年前に重松氏の原著『朝鮮農村物語』を読み深く感動した。ストーリーも感動の連続であるが、そのベースとなるものは重松氏のすばらしい人間性である。その魅力にひかれ『続 朝鮮農村物語』も読んだ。講述テープ『卵から牛へ 私と朝鮮 』も聞いた。なんとすばらしい人だろう、こんなすばらしい人はこれからも語り継がれるべき人だとひそかに尊敬していた。田中秀雄氏も重松まさなお氏のすばらしさに感動され、多くの関連資料にも当たられて、このたび『朝鮮で聖者と呼ばれた日本人 - 重松麟修物語 - 』を出版された。著者は多くの資料に基づき、時代背景も含めて、重松氏の前半の人生、後半の人生を通して実に丹念に愛情をもってまとめあげられた。すばらしい本である。重松氏のことを記憶し、語り継ぐための格好の教材である。」

私はこの本の著者の田中氏とも知り合いになり、情報交換している、応援もしている。以上のように四年前に重松氏のことを取り上げて以来、この件はこの四年間で大きく進展した。

これが「それから四年」というタイトルをつける所以である。

他にもこの四年間で進展したことがいくつかあるが、その中から2件を追記したい。ひとつは、前回取り上げた『長崎高商 第19回卒業記念アルバム』（父の卒業アルバム）のことである。私はずっとこれを探していた。昨年これが古本市場に出たことをインターネットで知り直ちに購入した。大正15年の卒業生は167名であるので、167分の1が85年ぶりに出現したのである。まさに奇跡に近い。そのアルバムは厚さ5cm、重さ3Kgもあり、革装丁、天金仕様の立派なものである。まず写真の多さに驚く。それと卒業生ひとりひとりの寄せ書きが面白い。

「拙者は良妻を貰はんがために高商に来たんである」と豪語する者あり

「コンゲンシテコンゲンスリヤ ヨカコタァヨウシットルバッテン オンダチャドンゲンナルトカシアン

イッチョンワケクチャワカランバイ」と悩む者あり

「こいからやっどう」と意気込みを表明する者あり さまざまである。

もうひとつは、上記重松資料探索の過程で父の若かりし頃の論文と俳句を見つけ出したことである。これらを見つけたときは思わず声をあげた。全く予期せざることだったからである。論文は「組合の内部牽制組織に就て」というタイトルで計10頁あり。（機関紙『金融と経済』昭和2年3月、4月号）赴任して1年後の理事見習明けの論文であろう。内部牽制とか内部統制は80年前も同じく企業組織の重要課題であったことがうかがえる。

俳句は『金融組合』文芸欄、昭和10年から11年にかけて投句していた30句を見つけた。鴨緑江畔にある義州の金融組合時代に詠んだものである。そのなかから2句。

春愁の 古きアルバム なつかしむ 黙人(父の俳号)

卒業アルバムを見ての感慨であろうか

土匪の住む 山漠々と 眠りけり 黙人

国境の鴨緑江の氷上を渡って来襲する土匪に対する恐れ

以上、四年前の拙稿「母校の百周年記念とわが家族史の一端」の続編としてその後の進展を

「それから四年」としてまとめてみた。なにか関連情報があればご教示頂きたい。